■ 堀川すなお個展「解釈と行為」

製図のような独特な作風

大阪市西区の大阪府立江之子島文化芸術創造センターｎｏｃｏで、堀川すなおの個展「解釈と行為」が開かれている（24日まで）。

堀川は２０１２年京都芸大大学院油画専攻を修了。若手作家の登竜門であるＶＯＣＡ展や水戸芸術館現代美術ギャラリーの「クリテリオム」に取り上げられるなど、活躍の場を広げている。近年の制作で特徴的なのは、一定のルールを設けてドローイングを行っている点だ。

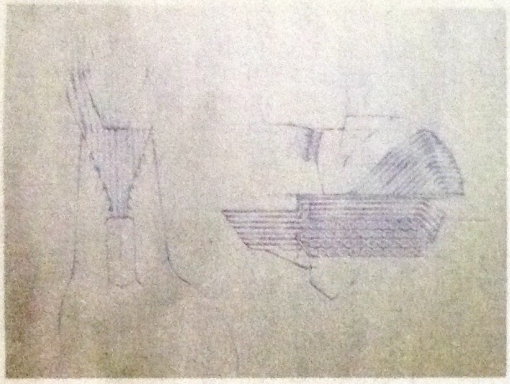
たとえば、13年から14年にかけて取り組んだ「モチーフを観察して描く」というシリーズでは、「１つのモチーフを色々な角度や距離から観察する」「目で見えたとおりに描く」という約束事に基づいて、１つのモチーフにつき数十枚の習作が生み出される。画材は青鉛筆のみであり、定規やコンパスを用いて正確に形を写し取っていくのだが、出来上がった作品は私たちがふだんその物に対して抱いているイメージとは大きく異なる（写真はバナナを描いた習作の一部）。

これは一種の抽象化の作業であるが、その背後には対象のどの部分を導き出すかという主観の入り込む余地が残されている。堀川の場合は色や触感ではなく、構造と細部が関心事であり、そのことが製図のような独特の作風を生み出している点が興味深い。

さらに本展ではいくつかのルールを拡張し、言葉や他者を介した制作やワークショップを行っている。その実験から明らかになるのは認識や表現の多様性であり、コミュニケーションの奥深さだ。

客観的、論理的なプロセスを経て自らの表現を変換していこうとする堀川の試みは、今後どう展開するのか。大きな可能性を感じさせる。

（西宮市大谷記念美術館 学芸員 池上 司）



一定のルールを設けて描かれたドローイングを展示する